
タイムスリップ before 1000 years

ODA 義経

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムスリップ before 1000 years

【Nコード】

N3485Z

【作者名】

ODA 義経

【あらすじ】

突如タイムスリップしてしまった！それも、平安時代に……！貴族でも、皇族でもない現代人の彼女が、どのようにしてこの時代に馴染むのか？という、歴史ファンタジー、のつもりです。（設定は平安、ですが、世界観が時々壊れたり、これはこの時代とは矛盾する……などの歴史ファンの方々がいらっしゃれば、ご意見をください）

第1話 暗闇。(前書き)

少な目、ですがどうぞ。

第1話 暗闇。

私が目が覚めたのは、とある場所。
妙に肌寒い。

と、いうか、ここはどこだろう。
ていうか、私、何してたっけ…。

確か、記憶の糸、というか、過去を探る。

私はただの中学生だったはずだ。

可愛くもなければ、特に注目される人でもない、カリスマ性もなければ、特別運動能力が優れているわけでもない。
特に勉強が無理だ。

国語、1。数学、1。社会、1。理科、1。英語、1。

そんな人間は、漫画にしかいねえよ！

って叫び声が聞こえなくもない。

どこかの射的が得意な眼鏡少年と同じ……じゃない。

彼には、射的と勇敢な心がある。

でも、私にあることと言えば……。

あっ！ あったあった。

舌！

舌の感覚は鋭い。

目隠ししてでも、コーヒー牛乳の、牛乳とコーヒーの比率や、酢豚に入っている調味料の比率を言える。

どうでもいいことだが、私にとっては非常に重要なことなのですよ。

と、話を元に戻そう。

ここはどこだ？

呼吸ができるということは、少なくとも酸素がある場所ということだ。

それが、地球なのか、はたまたどこかの惑星なのかはさておきだ。

続いて、肌寒い。

ものすごく寒いわけじゃない。

わかりやすいところでいうと、11月初旬の天気くらい？ いや、わかりにくいかな…。

どう言え方がいいのだろう。

冬着をするには早いけど、半袖では寒いだろうっていう？ 程度の寒さだ。わかんにくいなら、想像におまかせします。

少し寒さも堪えてきたので、二本ずつある手足の感覚を確かめて、腕を擦った。

どういうわけか、半袖だ。

本当にここは寒い。

どうしてこんなことになったのか…。

で、結局、目の視界は今だ真っ暗。

もしかして、目が無いなんて事態も考えたけど、瞬きができるのだから、たぶんただ暗い部屋か場所か何かにいるだけだ。

というか、なんで私はこんなところに？

私は意を決して動き出すことにした。

しかし、私がいくら手足を動かしても、そこに壁は見当たらなかった。

壁はなく、どこまでも続いているような気がした。

いっこうに、光は見えないし、世界の果ても見えない。

私は徐々にパニックに陥った。

いったいなんなのよ？

私、なにかした？

なにしまったのよ？

それにしても、この仕打ちはひどいんじゃないの？

怖い……

怖い怖い……

怖い怖い怖い……

不安のせいで、妙な脂汗が流れる。

不安はどんどん募る。

もしかしたら、これがいわゆる「世界の裏側」とかだったりするのか。

とも何度も考えた。

光など、一ミリにも感じられない。

ひたすら、闇。

闇。

闇。

闇。

闇。

闇。

「誰かつ……助けてえ……っ……」

声を、いや、聞こえているのかわからない。

今にも泣き出しそうな、不安の声で叫んだ。

と、そのとき…。

「誰ダァ？こんなところにさ居るのワァ？」

一人の男性が、突如、明かりをつけて現れた。

第2話 縁。(前書き)

遅れました。

第2話 縁。

「ほら。食べな」

「あ、ありがとうございます……」

今は、私が一人でうろうろとしていたらしい場所のすぐ近くで、さっきの男性とキャンプを張っている。

「お前、この辺りじゃ見かけない人だな…なんだ？旅の人か…？」

「……」

私は質問に答えない、いや、答えられない。

なにせ、旅の人間ではないからだ。

というか、車で全国を回れる時代に、そんな旅をしようと思う人など、めったにいないだろう。

私は、さっき渡された、お粥のようなスープを飲んだ。

さっきまで冷えていた体は、徐々に温かみを取り戻した。

「そーいやお前、名前は？」

「私は……、ふじわら ゆかり 藤原 縁です」

「ほう。藤原の氏まで持つとは、お前、結構高い位の人間か…？」

私は、その質問には答えようがなかった。

位ってなに？

そう思った。

「俺の名前は、仁六^{じんろく}だ。よろしくな」

そういうと、そのまま布団に潜っていく。

いや、それが布団とわかったのは、彼がそこに入ると、眠ってしまったからだった。

それは毛皮で出来た、コートのようなもので出来ていて、とても暖かそうだった。

私も眠ろうと思い、毛皮に潜る。

すると、私が着ていた服のポケットに、なにやら一つ、入っているのが見つけた。

それは、ケータイ。

私はそれを開いてみた。

待受画面が写し出された後、電波の数を確かめる。

「圏外」と示された電波は、ここからでは何もできないことを物語っていた。

明日、もっと電波状況がいいところで、携帯を使おう。

そう心に決めて、眠りについた。

「おい！縁！縁、起きな！」

仁六が私を起こしたのは、夜明けになる、少し前だった。

前についていたキャンプの火も、今では消えて、煙を出すばかりだ。

「今から村へ向かうぞ。もしかしたら、お前のことを知っている人間がいるかもしれねえしな」

私も頷き、起き上がった。

その瞬間、体に寒気が広がる。

全身に鳥肌が立ち、歯ががちと震え出す。

「寒いなら、これを着ておきな」

渡されたのは、さっき布団として使っていた、毛皮だった。

こうしてコートとしても使うとは。

しかし、寒い今はどうでもいい。

できる限り暖かい格好をして、私は、仁六の後へついていった。

仁六は松明を手に、森や草木の映える下り坂を、次々と降りていく。私もなんとか必死にその後を追っていった。

「ちゃんとして来てるか？ 縁？」

「はあっ……はあっ……大丈夫です」

私は結構疲れたが、なんとか下り坂の恐怖はなくなり、なだらかな坂道を歩くこととなった。

どうやら、小さな峠を越えるつもりらしく、ゆっくりと山道のような場所へやって来た。

そのころには既に夜が明けたため、あの下り坂のように、暗くて視界が狭く、岩がごつごつしていて危険だ、ということもない。

ゆっくりと確実に上っていけば、大した危険など存在しなかった。ゆっくりと上っていき、頂上にたどりつく、その遥か下、つまりは山の根本あたりに村のような小さな集落があるのがわかった。

「あそこが俺の村だ。しっかりついてこいよ」

その下山も、意外と危険だった。

山は、上りきったときより下るときの方が、事故が多いらしい。

上りきった達成感のせいで気が緩むのが原因の一つ。

あとは、上りより、下りの方が、体重の関係上、滑りやすいのも原因だ。

と、仁六は言った。

「ただいま」

「よう！仁六！帰ってきたか！今日は収穫はあったか？」

「いや。残念ながら、今回は収穫無しだぜ」

「へえ。あんたでもそんなことがあるんだなあ！？」

「あっ！！そうだった。お前、藤原縁っていう名前のやつ知ってるか？」

「藤原縁？いや、俺は知らねえぜ？藤原っていうことは、新しい国司かなにかか？」

「いや、迷子になってたんで、俺が助けた女の子の名前なんだが、自分の住んでいる場所がわからねえらしいからな。知ってる人間がいないかどうか確かめに来たわけよ」

「そこんとこの子供か……。でも、知ってるやつは誰もいないと思うぜ？ なんだったら、お前が引き取ってやったらどうだよ？」

「いや。この子の家族がもしかしたら心配してるかも知れねえからな。そういうわけにはいかねえだろう」

私は、この村をよく見ていた。

遠くから見ると、ただの集落にしか見えなかったが、近くで見ると、その家の形に驚いた。

屋根だけの家がいっぱいある。

それに、その家一つ一つが藁で出来ている。

まるでテントのようだ。

暖かいのかどうかはさぞかし不安だったが、今はそんなことはいってられない。

「縁。家に来るか？ 大したおもてなしは出来ないけれど、お前を一人にさせることもできねえからな」

「い、いいんですか？ ありがとうございますっ！」

私は深々と礼をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3485z/>

タイムスリップ before 1000 years

2011年12月19日21時52分発行